

Hondaの交通安全情報紙



Since 1971



～ Safety for Everyone～
Hondaはすべての人の
交通安全を願い活動しています。



●編集室：本田技研工業株式会社 安全運転普及本部内
〒107-8556 東京都港区南青山2-1-1
TEL 03(5412)1736
http://www.honda.co.jp/safetyinfo/
●編集人：千葉英雄
※年間購読をご希望の方は、下記までお問い合わせください。
(株)アストクリエイティブ 安全運転普及本部係
TEL 03 (5439) 1191 E-mail:sj-mail@spirit.honda.co.jp

SJホームページは

CONTENTS

- 特集：子どもへの交通安全教育
「止まる」「観る」そして「考える」ことが大切……①
- 教育最前線／警視庁・新自転車教育プログラム……④
- NEWS REVIEW①／高齢歩行者・高齢自転車乗用者対策の充実のための調査……④
- 現場訪問／亀山市立中部中学校・交通安全教室……⑤
- TOPICS／第12回全国自動車教習所教習指導員安全運転競技大会……⑥
- NEWS REVIEW②／平成23年度国際交通安全学会研究調査報告会
ならびに学会賞贈呈式……⑥
- STREAM／熊本県での高校生交通安全教育活動 第1回……⑥
- 危険予測トレーニング(KYT)/ペットが飛び出してしまった時(子ども編)……⑦
- 指導者ファイル／茨城県ひたちなか市・交通安全教育指導員の皆さん……⑦
- SJクイズ……⑦
- DOCUMENT EYE ⑧
児童・幼児の自転車用ヘルメット着用状況を観察する……⑧

特集：子どもへの交通安全教育

「止まる」「観る」そして「考える」ことが大切



平成23年の歩行中および自転車乗用中の交通事故死傷者数を年齢層別にみると、いずれも高齢者(65歳以上)の次に多いのは子ども(15歳以下)である。次代を担う子どもの交通事故防止は重要な課題だ。今回は、地域の交通指導員による工夫を凝らした幼児・児童への教育事例や、識者による事故分析を紹介しながら、子どもたちに何を伝えるべきか探る。

5月7日、山口県宇部市にある明光幼稚園で、年長(5歳)クラスの園児120名を対象にした交通安全教室が開催された。同園では毎春、年長クラスが遠足で市内の公園に歩いて行く。その際に信号機のある交差点などを通るため、事前に交通安全に関する知識を伝える機会を設けている。指導を担当するのは、宇部市交通安全対策協議会に所属する交通指導員の縄田律佐さんと井上信恵さん。
二人はHondaの交通安全教育プログラム「あやとりい ひよこ編(以下、あやとりい)」の中にある「音当てクイズ」を使う。園児たちの前に交通場面のイラストを置



知っている人に呼ばれても、すぐに走り出さないように指導

き、交通に関する音を順番に聞かせる。何の音かわかった園児に、その音がイラストのどこに当たるかを前に出て指し示してもらおう。その後、二人がワンポイントアドバイスをを行う。

信号を守る。飛び出しはしない

例えば、「トラックがバックする時の警告音」を聞かせた時は「トラックがバックする時は白いランプが光って音がします。こういう時はトラックに近づいてはいけません」。「クルマの急ブレーキの音」の時は、「どうしてクルマは急ブレーキをかけているのかな?」と問いかける。すると、園児たちが「子どもが飛び出しているから」と大きな声で答える。「そうです。みなさんは、道路では絶対に遊んだり、飛び出したりしないでください」と二人は付け加えた。



宇部市交通安全対策協議会に所属する交通指導員の縄田律佐さん(写真左)と井上信恵さん(写真右)は幼児向けの交通安全教室で「あやとりい ひよこ編」の音当てクイズを活用している

続いて、二人は交通安全の2つの約束について話す。1つ目は「信号を守ります」。縄田さんが信号の色の意味を説明する。「赤は「止まれ」。絶対に止まってください」「青は「進め」ではなく、「進んでもいい」。

2つ目の約束は「飛び出しはしません」。道路を横切ったマットをはさんで担任の先生と園児に斜めに向かい合ってもらおう。先生が「こっち、こっち、早く」と声をかけると、園児は先生に向かって走り出す。すると、クルマの役に扮した井上さんが走り込んでくる。

「道路に突然出ることを飛び出しと言います。まわりが見えないところからは絶対に飛び出さないように。道路を渡る前に、クルマが見える場所まで出て、必ず一旦止まってクルマがいなくなったことを確かめてください」。

子どもが正しい行動をしたら必ずほめる

最後は、横断歩道の渡り方。「渡る前には「サイン!」と口に出して、右手を上げましょう。クルマへの合図なので、まっすぐに手を上げなければクルマには見えません。そして、「右ヨシ、左ヨシ、右ヨシ」と右左右を観て、クルマが来ていないこと

※あやとりい=Hondaが鈴鹿市と協力して開発した交通安全教育プログラム。4～5歳児対象の「あやとりい ひよこ編」、小学3～4年生対象の「あやとりい」、幼児～小学校高学年対象の「あやとりい 自転車教室」、高齢の歩行者・自転車利用者対象の「あやとりい 長寿編」がある。あやとりいは「あんぜんを やさしく とぎあかし りかいて いただく」の略。詳細は以下ホームページを参照。 http://www.honda.co.jp/safetyinfo/kyt/ayatori/



道路を横断する時は、「サイン!」と手を上げて、右左右の安全を確認、道路の真ん中で、さらに左側から近づいてくるクルマがないか確認することを身につけてもらう

を確かめて渡ります。道路の真ん中まで来たら、「左ヨシ」とまた左を覗きます」と、縄田さんが模範を見せる。それを園児一人ひとりが実践して、交通安全教室は終了した。

明光幼稚園の麻生起世園長は「園児たちには、クルマが避けてくれるのを期待するのはなく、常に自分から危険を回避することができるようになってほしいと考えています。そのため、こうした交通安全教育は重要な機会だと位置づけています。また、交通指導員の方の手法を参考にし、私たちが年少クラスの園児に指導を実践しています」と、交通安全教室の意義を語る。

山口県宇部市では市内にあるほほすべての幼稚園・保育園で、このような交通安全教育を展開している。それを担っているのが交通指導員の縄田さんと井上さんである。二人は「私たちが子どもたちと接する機会に限られています。ですから、その時間の中で必要なことを身につけてほしいと考え、特に幼児には『2つの約束』に絞った指導をしています」と話す。「指導をする上では、子どもをほめることを心がけています。厳しいことも言うこともあり、指導が、正しい答えを発言してくれたり、指導したことができた子どもには、『よくできたね』と必ず声をかけます。ほめることで、その行動が正しいことを自覚してもらえ、自信にもつながると思います」と縄田さん。井上さんは、「昨年、交通安全教室の導入で『あやとりい』の音当てクイズを活用していますが、どの幼稚園でも子ども

「あやとりい」を使って 路側帯の意味を伝える

ちの集中力が高まると好評です。今後は、音当てクイズ以外の教材も指導に取り入れていきたいと考えています」と言う。

子どもの歩行中の交通事故死傷者数を年齢別にみると、多いのは小学1年生と2年生である。こうしたことから、小学校低学年への歩行者教育も重要である。さらに、高学年になると本格的に自転車を利用し始めるため、自転車教育も欠かせない。

5月11日、岡山県津山市にある津山市立



津山市立勝加茂小学校では校庭に模擬の路側帯や交差点をつくり、1・2年生が歩行訓練を行った

勝加茂小学校では同校の1～6年生130名に対する交通安全教室が実施された。内容は1・2年生(43名)が歩行者教育、3～6年生(87名)が自転車教育(あやとりい、自転車教室)。歩行者教育は、津山市交通



津山市交通指導員の三谷温美さん(写真左)と里見真理子さん(写真右)



三谷さんと里見さんは「あやとりい」を使って、歩行者が歩くべき場所を説明

指導員の三谷温美さんと里見真理子さん、自転車教育は本田技研工業(株)安全運転普及本部鈴鹿普及ブロックのインストラクターが担当し、駐在所の警察官や児童の登下校をサポートする「見守り隊」の方々も指導に加わった。

1・2年生向けの歩行者教育では、まず「あやとりい」を使って、交通ルールの再確認をしていく。歩道と車道が分かれている道路のイラストを見せ、「どこを歩けばいいでしょうか?」と、三谷さんが児童に質問する。そして、児童が前に出て、子どものイラストを歩道に貼った。三谷さんは、歩道がある時は必ず歩道を歩くように伝える。次に、路側帯のある道路と、女の子の子のイラストを使い、ふざけたりして白線からはみ出してしまおうと危険であることを説明した。

3年生以上の児童は、3・4年生と5・6年生に分かれて自転車教室が行われた。児童は自分の自転車に乗って、校庭に設けられたコースを使って、正しい乗り方を体験しながら学ぶ(内容は3面写真参照)。同校の小林俊道校長は「歩行者教育、自転車教育ともに、全校児童が体験を通じて学べたことが良かった。児童も熱心に取り組んでいた。こうした参加体験型の教育は効果的だと思います」と、今回の交通安全教育の成果を語る。

目で観て判断することを伝える

「止まれ」の標識がある交差点でも必ず一旦止まって、右左右の安全を確かめてから渡るように指導。コースの途中では交通指導員の三谷さんと里見さん、担任の先生方が児童の動きを見て、うまくできていなかったり、どうしていいか迷っている児童にアドバイスを行った。

津山市交通指導員の三谷さんは、最近の子どもについて指示待ちの傾向があると感じている。「歩行訓練をする時、止まって、

「あやとりい」を活用したいという自治体、警察、団体の方は最寄りの地区普及ブロックにご相談ください。

- 栃木普及ブロック (栃木県真岡市) TEL: 0285-84-7114
- 埼玉普及ブロック (埼玉県狭山市) TEL: 04-2955-5323
- 浜松普及ブロック (静岡県浜松市) TEL: 053-439-2316
- 鈴鹿普及ブロック (三重県鈴鹿市) TEL: 059-370-1553
- 熊本普及ブロック (熊本県大津町) TEL: 096-293-3206

「Honda交通安全かるた」の大判セット(定価2万円・税込)および普通サイズ(定価500円・税込)の詳細や購入方法などは以下のホームページを参照。

<http://www.honda.co.jp/safetyinfo/karuta/>



左右の安全確認の動作はするものの、指導員や先生が「行っていいですよ」と言うまで動かない子どもが増えているように思います。そういう子どもには、信号やクルマを観て、行っても大丈夫かよく考え、自身で判断して渡るように声をかけています。子どもたちには、自分の命は自分で守れる力を身につけてほしいからです。」

津山市では昨年「あやとりい」を導入している。「昨年、他地域の指導事例を見学する機会があり、子どもたちも参加できる効果的な教材であることがわかりました。私たちの交通安全教育の中にも取り入れたらと考え、ホンダから指導ノウハウを教えてくださいました」と三谷さんは振り返る。

里見さんは「子どもたちに路側帯の意味を教えるのに『あやとりい』が役立っています。白線が車道と歩道を区別していること、白線の内側を歩くべきことをイラストによって示すことができるので、子どもにも理解してもらいやすい。今回のように、『あやとりい』による説明の後に、模擬の路側帯で歩行訓練を実施すると、さらに効果的です」と、「あやとりい」を使った感想を話す。

かるたで遊びながら 交通安全に親しむ

「あやとりい」とともに、遊び心のある交通安全教材として地域の指導者に活用されているのが「ホンダ交通安全かるた」で

特集：子どもへの交通安全教育

ある。子どもたちに覚えてほしい交通ルールやマナーが45種類紹介されており、かたで遊びながら、「正しい交通行動」や「命の大切さ」について学べるようになってきているのが特長だ。

静岡県交通安全協会藤枝地区支部では、今年度からこの「交通安全かるた」を子ども向けの交通安全指導に取り入れている。5月26日、藤枝市青島南公民館で開催された交通安全教室の中で、「交通安全かるた」による指導が行われた。参加したのは小学1～6年生24名。6名ずつ4グループに分かれ、児童はかるた取りに挑む。各グループの前に45枚の絵札が並べられ、静岡県交通安全協会藤枝地区支部主任交通安全指導員の梅田礼子さんが読み札を一枚一枚読み上げていく。そして、すべての札を読み終えると、最も多く絵札を取った児童を全員

ブレーキの正しい使い方を身につけるトレーニング。写真右のバイクまで全力で自転車をこぎ、その後、両手のブレーキを使って写真左のバイクに合わせて停止する



勝加茂小学校3年生以上には、本田技研工業(株)安全運転普及本部鈴鹿普及ブロックのインストラクターが自転車の安全な乗り方を指導



「止まれ」の標識のある場所では停止線の手前で止まり、右左右と右後方の確認をしてから発進することを伝えた



最後に、子どもたちは指導員が上げた旗とは逆の方向に回避して停止するという課題に取り組んだ



かるたのかるたを使って、子どもたちに安全アドバイスをする交通安全指導員の梅田礼子さん



かるた取りに夢中になる子どもたち

が走り横断を促すという可能性が認められます。ただし、今回のデータでは子どもの歩き横断者が非常に少なかったために、関係者がいたほうが走り横断の割合が高くなるという結果は得ることができませんでした。しかし、

が拍手でたたえた。

この後、梅田さんは大判の絵札を用いて、交通安全指導に入る。最初に取り出したのは『た』の絵札。「これは女の子が止まっ、近づいてくるクルマを覗いている絵です。見通しの悪い交差点は、右左右をよく観てから渡りましょう。読み札の通り『立ち止まり 左右確認 交差点』と覚えてください。この他にも、いろいろな絵札を見せながら、歩行中・自転車乗用中を守るべき交通ルールを梅田さんは説明した。

梅田さんは「目と耳を使って交通安全の基本を学べる点が良いと感じ、導入しやすかった。遊びを通じて、交通安全に親しむことができるので、子どもには最適だと思えます」

結果①：子どもは「飛び出し」が多い
結果②：危険を感じると走って避難しやすい
結果③：仲間や家族の影響が見られる
結果④：駐車車両の影響が見られる

この中で、松浦教授が注目しているのは結果③と結果④。

「結果③に関しては、子ども(12歳以下)の場合には事故時に関係者(仲間や家族)と一緒にいるケースが大部分であり、それが走り横断を促すという可能性が認められます。ただし、今回のデータでは子どもの歩き横断者が非常に少なかったために、関係者がいたほうが走り横断の割合が高くなるという結果は得ることができませんでした。しかし、

子どもの飛び出し事故の実態と理由を再検討

今回、紹介した教育現場の事例では、「止まる。観る」ということに主眼が置かれており、それは子どもの飛び出し事故を防止するためだ。昨年10月、(財)交通安全総合分析センター主催の「第14回交通安全・調査分析研究発表会」で、「子どもの飛び出し事故の事例分析」を発表したのが、実践女子大学人間社会学部(東京都日野市)の松浦常夫教授である。

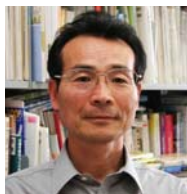
松浦教授による「子どもの飛び出し事故の事例分析」の目的は、事故事例分析と統計分析によって、飛び出し事故の実態と理由を再検討することである。事故事例分析は、(財)交通安全総合分析センターが保有するマイクロ事故統計データベース(平成5～21年)にある横断歩道付近とその他の横断歩道外を横断中の歩行者が関与した事故102件を主たる対象としている。

そして、その分析から得られた結果は次の4点である。

なぜ子どもは道路に飛び出してしまっのか

松浦教授は、子どもに飛び出し事故が多く見られる要因として、子どもは危険予測能力が未熟であることを挙げる。

「ドライバークラッシュやライダークラッシュは自動車教習所で運転中の危険予測について学び、実際に運転していく中でさらに学習を積んでいきます。しかし、子どもの歩行者の場合は、歩行中の危険予測を学ぶ機会がほとんどありません。また、『道路を横断するには歩くより走る方が安全だ』と子どもは考えがちです。そして、危険が潜在的なものである時には、危険と考えません。例えば、『左右から近づくクルマが何かに隠れて見えていなければ危険はない』と判断してしまっわけです。子どもの飛び出し事故の最大の原因は、道路横断に関する危険予測能力が、子どもには欠如している点にあると言えます」。



実践女子大学人間社会学部 松浦常夫教授

「クルマが左から来るかもしれない」といった危険予測を妨げるものとして、子どもに特有なくつかの心理特性があると、松浦教授は指摘する。その1つは衝動性、動作優位。子どもはふだんから活動性が高く、走りやすいが、特に何か目標を見つけたら、危険を感じたりするとそれに向かってあるいはそれから逃げようとして走りやすい傾向がある。

もう1つの要因は、発達心理学者のピアジェが言う中心化や自己中心性である。中心化というのは、知覚的に目立つ特定の次元にだけ注意を払う傾向。車道に沿って歩いている時に興味ある対象を道路の向こう

側に見つけると、そこに注意を奪われ、それに走って向かいやすいということがその一例だ。自己中心性は、自分の視点からだけ外界を見る認知の仕方であって、やって来るクルマが見えなければ安全と思うというようなことを指す。

「さらに、子どもは身体的にも未成熟であって、横断事故では特に身長の高さが問題となります。見通しの良いまっすぐな道路であれば問題ありませんが、駐車車両や看板などがあって見通しが悪いところでは、背の低い子どもは左右から来るクルマを発見しにくい。見通しの悪さは子どもだけでなく、ドライバークラッシュにとっても子どもの発見を遅らせる要因となります。また、幼児においては保護者の監督不十分も原因と言えるでしょう。保護者が幼児から目を離さなければ防げた事故は少なくないと思います」と松浦教授は補足する。

立ち止まり、走らないで歩いて渡る

では、危険予測能力が未熟な子どもに伝えるべきことは何か。松浦教授は、横断歩道の場所とその利用を教えることが重要だと言っ。しかし、こういった子どもでも横断歩道外を横断する機会がある。その時はどうすれば良いのだろうか。

「指導者や保護者から伝えてほしいのは『止まる。走らないで、歩いて渡る』。危険が感じられない横断場所でも、一旦、立ち止まること、横断時は走らないことを教えてあげてほしいと思います。そうすることで急いでいる気持ちが静まり、自然に安全確認という行動につながることを期待されます。これはイギリスの子どもの道路横断指針(Green cross code)にある『Stop, Look, Listen and Think(止まって、観て、耳で聞いて、考えなさい)』に基づくものです。幼児や小学校低学年が横断する時は、『止まる。観る。歩く』を推奨し、それ以上の子どもには『止まる。観る。考える。歩く』を指導するのが良いと考えられます」。

このような歩行者教育で身につけた交通安全の基本は、子どもが自転車利用者となった時にも役立つのではないだろうか。